



# 琉球大学学術リポジトリ

University of the Ryukyus Repository

Title	サッカー実技の授業方針
Author(s)	笹澤, 吉明
Citation	琉球大学大学教育センター報 = University Education Center Bulletin(13): 25-26
Issue Date	2010-02
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/41506">http://hdl.handle.net/20.500.12000/41506</a>
Rights	

## サッカー実技の授業方針

「健康・運動実技（サッカー）」担当 笹澤吉明（教育学部）

教科教育が教育学部の主流になりつつある。いかに良い授業を展開するかが課題となっている。しかしながら、方法論のみが先行し、本質的な議論になっていない。本質的な授業とは何か。これは学生が新しい知識や技能を身に着け進化することだと考えている。

教科教育の分野から「楽しい授業」というキーワードが出てきた。勿論楽しく学ぶことは学習にとって重要な要素であろう。スポーツの場面での楽しさは、シーデントップが言うように、他者との競い合いで勝利を得たり、自己の記録を更新したりすることと容易に結び付けられる。しかしながら、上記に加え、できない悔しさ、敗戦の苦い経験、これらの経験を通して、それを克服したときの感動も、上記を上回る楽しさだと考えている。

私の授業は基本的に以下の流れである。挨拶—オリエンテーション—ウォーキング—ジョギング—体操—ストレッチ—ボールコントロール—試合—反省—挨拶。ウォーキングから試合までは基本的に学生主体に行っている。それは授業の目的に、生涯スポーツとしてマネジメントできる能力を身につけることがあるからである。社会人となれば、スポーツの場は自分自身でマネジメントしなければならない。例えば、地域のスポーツクラブを見つけ参加したり、自分でクラブを立ち上げたりという能力が必要となる。したがって、学生には常に能動性を要求している。

挨拶は姿勢正しく大きな声でできないとやり直しになる。部活動のようだが、事故にもつながるスポーツを始めるにあたっての心構

えとして重要な導入である。またスペンサーが言う教育の三本柱である、知育、徳育、体育においても、挨拶をしっかりと行う徳育は大学教育で見落とされがちなものである。将来リーダーとなる学生諸君は知識だけでも、身体能力だけでも不十分であり、それに見合った人格が要求される。これは吉田兼好の悪友論でも指摘されているところである。

その後のオリエンテーションでは、本日の技術練習の課題を明確にし、さらに最近起こったサッカーのトピックスについて、私なりの見解を述べる。日本代表チームの戦術の良し悪しや、日本サッカー協会の取り組みに対する賛否や、琉大サッカー部の取り組みなどについてである。このような話を聞いて学生は臨場感を覚え、モチベーションを高めてくれているようである（話が長いという批判もあるが）。

チームは授業期間を通してほぼ固定しているので運命共同体となる。体操時に大きな声が出ていないチームは試合ができない。声を出す理由は、メンタル面でのウォーミングアップとパフォーマンスの向上を図るためである。運動時の声の発生はパフォーマンスの生理的限界に精神的限界を近付ける作用をもつ。また、ストレッチを重視させるが、これはけがの防止のためだけでなく、関節の可動域を高めることによるパフォーマンスの向上を図っていることを理解させている。このようなことを理解した学生は素晴らしい準備運動を行い、小中高生に見られるような儀式的踊りのような内容ではなくなるのである。

ボールコントロールでは小中高の授業ではおそらく行われてこなかった高度な技術まで扱っている。しかしながら、決して難しいものではなく、熟達したサッカー選手のコツのようなものである。これは、私自身がいまだ現役選手なみにサッカーを続けている成果であり、試技は40歳である私自身で行うが、学生に感動を与えるレベルであると自負している。

体育の授業でよくありがちなことだが、うまい生徒に試技を行わせ教師自らはその批評にとどまる光景がある。これは、水泳の授業で教師はプールに入らず、麦藁帽子と長そでを身にまとい、外から笛で指示して行うものと厳しく言えば同等である。これでは、説得力がなく、何よりも新しいことを教授しておらず、教育行為として成り立っていない。教師は教える内容に対してプロ並みの試技が要求されるのが当たり前だし、さらには今持っている最高のパフォーマンスを生徒の前で披露することがその責務であると考え。したがって、教師自身も常にその技を磨かなければならないのである。

一方で、以下のような授業が大学教育で多いと悲観している。それは、あるテーマを設定し、ろくにその教材について教授しないまま、自由に討論させるという授業である。これは、学生にとって意見が授業中に言えるという点で満足感が高いが、実際には何も学んだことにはならない。討論するという段階のレディネスは、相当そのテーマに対して勉強し尽した上で行うものであり、もしそうでないとなれば、教師の怠慢授業に他ならない。

話を戻すが、試合には人数が足りない場合私が入ることもあるが、基本的には外から戦術のアドバイスをしたり、良いプレーを称賛

したりしている。レフリーは学生が行っている。試合の準備や後片付けは学生全員で手際よく行う。試合後の反省では、本日の技術課題と結びつけ、良かったチームやその場面を解説する。得点した学生やファインプレーをした学生はそのつど評価し、他の学生から祝福をうける。

このような授業であり、ややもすると部活動のような内容であるが、学生はこのような厳しさや引き締まった時間を共有することに楽しみを得ているのではないかと思っている。学生はうわべの楽しさよりも、本物を教わりたいと要求しているように私は感じる。即ち、少しでもサッカーが上手になりたい、サッカーの色々な知識を学びたいという本質的な欲求である。私自身も授業を行う前にストレッチで体をほぐし、基本的なボールコントロールを練習し、さらには試合に臨むようなモチベーションを高めるように準備している。学生に何か一つでも「やった」という感動を味わってもらいたい。そして、「一人ひとりにうまくなって欲しい」という気持ちを持って、学生諸君と切磋琢磨し、模索しているのが私の日々の授業のスタイルなのである。